

シンオキナワシャコ (新称) *Oratosquillina inornata* (シャコ科) の国内記録

中島広喜 *

Distributional record of *Oratosquillina inornata* (Squillidae) in Japan

Hiroki NAKAJIMA*

キーワード: 干潟, ベントス, 口脚目, 琉球列島, 古標本

Key words: mud flat, benthos, Stomatopoda, Ryukyu Islands, old specimen

沖縄島と奄美大島から採集した *Oratosquillina inornata* (Tate, 1883) を国内から初めて標本に基づいて報告し、和名新称シンオキナワシャコを与えた。加えて東京大学総合研究博物館に収蔵されていた標本を再同定した結果、1世紀以上前に那覇から採集され、*Squilla perpensa* として報告された標本が *O. inornata* であることがわかった。これは琉球列島におけるオキナワシャコ *Oratosquillina perpensa* (Kemp, 1911) の分布記録の唯一の根拠であったことから、オキナワシャコの分布記録の見直しも行った。

This study reports on *Oratosquillina inornata* (Tate, 1883), which was collected from Okinawajima and Amami Oshima Islands. A new Japanese standard name for *O. inornata* was also given. The author identified a specimen as *O. inornata* previously classified as *Squilla perpensa* housed in the University Museum, The University of Tokyo. This observation showed that the distributional range of *Oratosquillina perpensa* (Kemp, 1911) around the Ryukyu Islands needs to be reconsidered.

はじめに

口脚目 Stomatopoda は世界から 7 上科約 500 種が知られている (Schram *et al.*, 2013)。そのうちシャコ上科 Squilloidea Latreille, 1802 にはシャコ科 Squillidae Latreille, 1802 の 1 科のみが認められ、その中に 49 属約 200 種が所属している。これは口脚目の科としては最も種多様性が高い (Schram *et al.*, 2013; Van Der Wal *et al.*, 2017)。このうちシャコモドキ属 *Oratosquillina* Manning, 1995 は頭胸甲の中央隆起線が Y 字型分岐の基部を欠くこと、捕脚長節外縁には末端棘を有すること、第 6 胸節が明瞭な 2 葉状の側突起を有することなどの形態から判別される

(Ahyong, 2001; 浜野, 2005)。本属には 13 種が知られている (Ahyong and Chan, 2008)。国内からの本属の記録については混乱が見られるため、その経緯を以下にまとめる。

駒井 (1914) は全長 70.5 mm の台湾産のメスと、全長 89 mm の沖縄県那覇産のメスに基づいて *Squilla perpensa* Kemp, 1911 [= オキナワシャコ *Oratosquillina perpensa* (Kemp, 1911)] を報告した。なおこの論文中には頭部と捕脚のスケッチが残されているが (駒井, 1914: 図 4, 4a), それぞれどの標本のスケッチかは不明なため、沖縄産標本の再同定にあたって用いるのは厳密には難しい。続いて Komai (1927) はパラオ、台湾、琉球列島より *Squilla*

* 横須賀市自然・人文博物館 〒238-0016 神奈川県横須賀市深田台 95

原稿受付 2025 年 11 月 29 日 横須賀市博物館業績 第 807 号

Corresponding author: Hiroki NAKAJIMA, h-nakajima@city.yokosuka.kanagawa.jp

oratoria var. *perpensa* としてオキナワシャコを報告した。ここで用いられた琉球列島産の標本は全長 89 mm のメス 1 個体とされているため、駒井 (1914) が報告した那覇産標本と同一の標本を用いていると考えられる。この後、紀伊水道外域、大阪湾、長崎県野母崎の沖合からオキナワシャコは報告されたが (浜野, 1989; 有山, 2004), 琉球列島からの追加記録は無く、駒井の用いた那覇産標本が琉球列島から唯一報告された個体である。

ここで、Ahyong *et al.* (2008) は台湾からシャコモドキ属の一種 *Oratosquillina inornata* (Tate, 1883) を報告した際、その分布域に日本を明示しなかったものの、Komai (1927) のオキナワシャコの記録は *O. inornata* であるという判断をシノニムリスト上で示した。Komai (1927) はパラオ、台湾、琉球列島よりオキナワシャコを報告したが、それぞれの産地の標本について別々に記載していないため、Ahyong *et al.* (2008) は琉球列島産の標本も *O. inornata* であるという判断をしたとみなせる。Ahyong (2004, 2016) では *O. inornata* をそれぞれフィリピンとシンガポールから報告すると同時に、日本産標本などの根拠を明示せずに日本を分布域に含めていた。これは、Ahyong *et al.* (2008) がシノニムリスト上で示した判断が 2004 年の時点から前提としてあったためと推察される。一方で、浜野 (2005), Ahyong (2012) では作成した日本産口脚目リストに *O. inornata* を含めなかった。また、インドから *O. inornata* を報告した Ahyong and Kumar (2018) や Silambarasan *et al.* (2025) でも *O. inornata* の分布域に日本は含まれなかった。以上のように、いずれの論文においても駒井の検討標本の直接の再検討がされていないことから、*O. inornata* の国内での分布記録を認めるかどうかは曖昧な状況である。

そこで本研究では、Osawa *et al.* (2004) や三橋・武田 (2006) がその存在を示した、東京大学総合研究博物館より発見された駒井の収集標本を再調査することで *O. inornata* が過去に国内から産していたかの検討を行った。また、標本の外部形態や色彩、ミトコンドリア DNA の部分配列に基づき *O. inornata* に同定される標本を琉球列島から新たに得たので併せて報告する。

材料と方法

2019 年から 2022 年にかけて、沖縄県沖縄島と鹿

児島県奄美大島の干潟において、徒手あるいはヤビーポンプを用いて採集調査を行った (第 1 図)。一部の個体はクローブオイルを用いて麻酔後あるいは氷殺後に新鮮な体色を撮影し、70–99% エタノール水溶液中に保存した。これらの標本は琉球大学博物館風樹館 (RUMF)、横須賀市自然・人文博物館 (YCM) に保管した。さらに、駒井の収集標本を調査するため、2022 年 7 月に東京大学総合研究博物館 (UMUTZ) を訪問し、収蔵標本調査を行った。外部形態の名称や全長・甲長の計測方法については浜野 (2005) に従った。標本は電子ノギスを用いて 0.1 mm 単位で計測した。

野外から採集した標本のうちの 1 個体 YCM-C1096 について、以下の手順でミトコンドリア 16S リボソーム DNA (16S rDNA) 配列を決定した。まず腹腔基部から取り出した筋肉と鰓をバイオマッシャー II (NIP) を用いてホモジナイズ後、DNA 抽出キット (NucleoSpin Tissue XS, Takara) を用い、プロトコルに従って全 DNA を抽出した。次に 16S rDNA の部分配列を PCR 法にて増幅した。PCR 反応液は KOD One PCR Master Mix (東洋紡) 5 μ l, 蒸留水 3.4 μ l, フォワードプライマー (10 pM) 0.3 μ l, リバースプライマー (10 pM) 0.3 μ l, 抽出した DNA 1 μ l の総量 10 μ l とした。反応に使用したプライマーは 16Sar-L (5'-CGCCTGTTTATCAAAAACAT-3') と 16Sbr-H (5'-CCGGTCTGAACTCAGATCACGT-3') (Palumbi *et al.*, 1991) である。PCR は 98°C で 10 秒, 50–55°C で 5–7 秒, 68°C で 10 秒の 35 サイクルの温度条件で行った。得られた PCR 産物は 1% アガロースゲルを用いて電気泳動を行い、増幅結果を確認した。泳動結果が良好であった PCR 産物 9 μ l に対して、蒸留水で 4 倍に希釈した EXoSAP-IT (Thermo Fisher Scientific) を 2 μ l 加え、37°C で 40 分, 80°C で 15 分置くことで精製を行った。精製した PCR 産物のサンガーシーケンスは外注し、得られた配列はアラインメントソフトウェア BioEdit v7.2.5 にて手動でアセンブルを行い、コンセンサス配列を得た。得られた配列は GenBank に登録した。

調査標本

沖縄県沖縄島 : YCM-C1096 (第 2 図, 第 3 図 A), 1 オス (全長 79.2 mm, 甲長 16.3 mm), 南城市佐敷, 20210411, 中島広喜採集 ; YCM-C1086 (第 4 図), 1 メス (全長 77.0 mm, 甲長 16.4 mm), 南城市佐敷,

20210810, 抱卵個体, 中島広喜採集; YCM-C1092, 1メス (全長 56.8 mm, 甲長 12.2 mm), 沖縄市美崎, 20220728, 中島広喜採集; RUMF-ZC-6546, 1メス (全長 91.6 mm, 甲長 20.2 mm), RUMF-ZC-6547, 1メス (全長 88.4 mm, 甲長 19.8 mm), 名護市湧川, 20200509, 中島広喜採集; YCM-C1094, 1オス (全長 91.4 mm, 甲長 19.3 mm), YCM-C1095, 1オス (全長 88.8 mm, 甲長 18.8 mm), RUMF-ZC-6977, 1オス (全長 78.4 mm, 甲長 16.7 mm), RUMF-ZC-6978, 1オス (全長 85 mm, 甲長 18.0 mm), 名護市我部, 20211212, 中島広喜・伊藤大輝・佐藤大義採集; YCM-C1093, 1メス (全長 93.7 mm, 甲長 21.6 mm), 大宜味村塩屋, 20200219, 伊藤大輝採集; RUMF-ZC-6498, 1オス (全長 82.0 mm, 甲長 19.0 mm), 1メス (全長 79.5 mm, 甲長 17.4 mm), 大宜味村塩屋, 20191214, 佐藤大義・辛島なつ採集; UMUTZ-Crs-Sto-46 (第3図B, C), 1メス (全長 89.7 mm, 甲長 20.7 mm), 那覇, 1894年, 白岩金次郎採集。

鹿児島県奄美大島: YCM-C1090, 1オス (全長 83.5 mm, 甲長 18.8 mm), 奄美市龍郷町, 20211117, 清水直人採集; YCM-C1091, 1オス (全長 85.0 mm, 甲

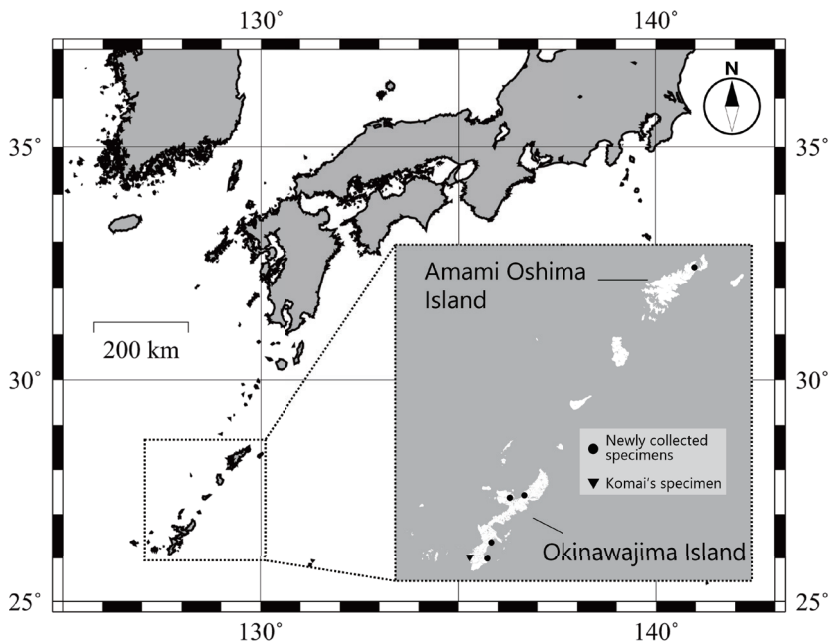
長 18.2 mm), 奄美市龍郷町, 20211206, 清水直人採集; RUMF-ZC-7910, 1メス (全長 64.5 mm, 甲長 15.3 mm), 奄美市笠利町, 20221006, 中島広喜採集。

結果と考察

Oratosquillina inornata (Tate, 1883)

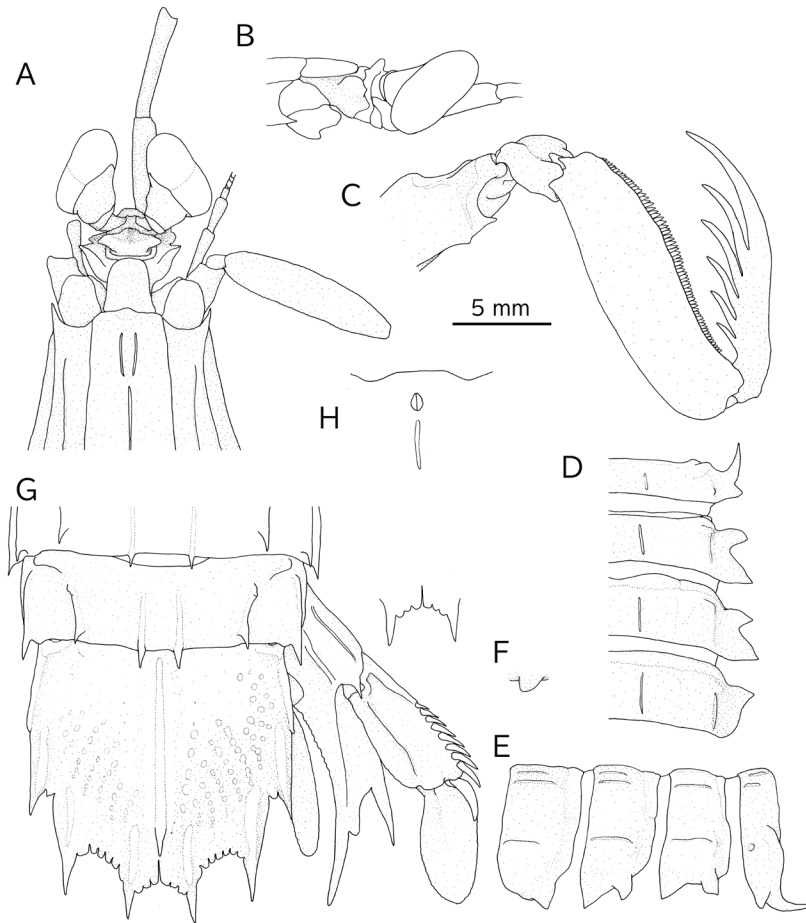
シンオキナワシヤコ (新称)

形態．頭胸甲や腹節の表面はほとんど平滑か、微かなくぼみが散在する。額板は中央隆起線を欠き、前側角は尖らず、丸い (第2図A)。額板長は幅の0.96倍から1.1倍程度。眼棘の先端は側面観で尖らず、鈍く角張るか、丸い (第2図B)。頭胸甲は中央隆起線の前方に、基部の欠落した低いY字状隆起を有する。捕脚 (第2図C) は指節内縁に6歯を有する。捕脚腕節背面隆起は滑らかで分断されず、先端は丸い。捕脚長節下縁末端は棘を有する。大顎髭を有する。第5胸節側突起は前方に向かう鋭い棘と側方に向かう三角形の小突起からなる2葉状 (第2図D, E)。第6胸節側突起は明瞭な2葉状で、前葉は四角



第1図 調査地の位置関係と、国内におけるシンオキナワシヤコ *Oratosquillina inornata* の分布図。丸は本研究で得られた標本の産地を、三角は駒井 (1914) と Komai (1927) が用いた標本のおおよその産地を示す。

Fig. 1 The location of the study cites and the distribution of *Oratosquillina inornata* in Japan. Circles indicate the collection cites of this study. Triangle indicates approximately collection cite of Komai (1914, 1927).



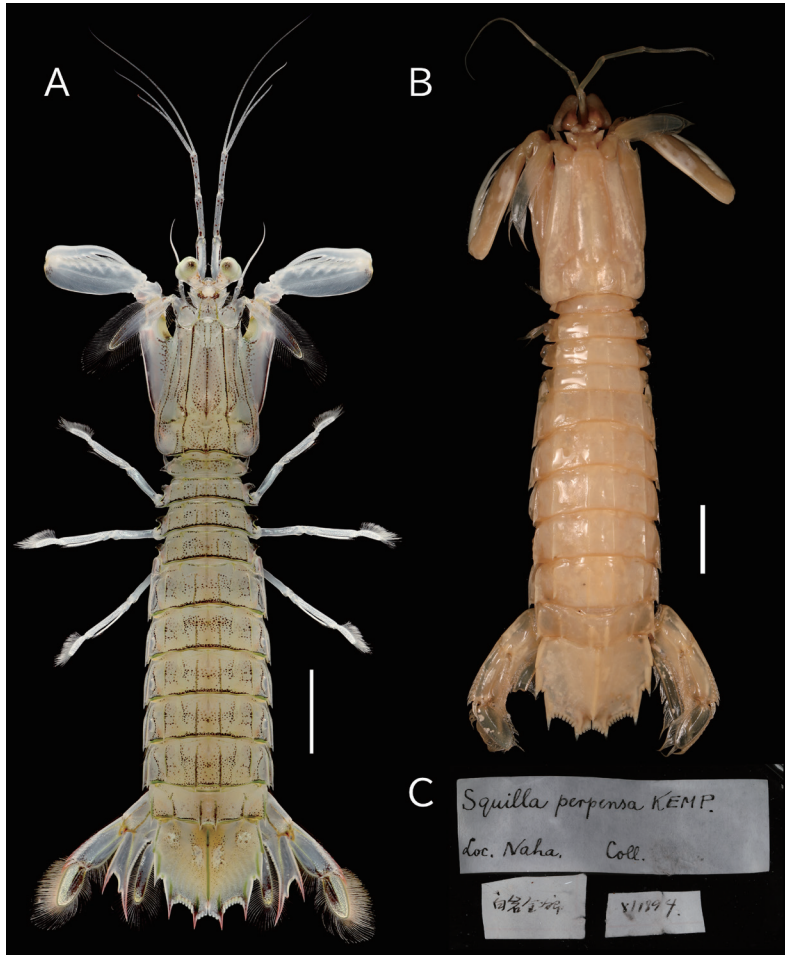
第2図 シンオキナワシヤコ *O. inornata*, YCM-C1096, オス, 全長 79.2 mm, A, 頭部背面; B, 頭部右側面; C, 右捕脚側面; D, 第5-8胸節右背面; E, 第5-8胸節右側面; F, 第8胸節腹面突起右側面; G, 第6腹節, 右尾肢, 尾節背面; H, 尾節腹面中央。

Fig. 2 *Oratosquillina inornata*, YCM-C1096, male, TL 79.2 mm. A, Anterior cephalon, dorsal view; B, same, lateral view; C, right raptorial claw, lateral view; D, right halves of TS5-8, dorsal view; E, same, lateral view; F, TS8 sternal keel, lateral view; G, AS6, uropod and telson, dorsal view; H, telson, ventral view.

形状, 後葉は前葉よりも幅の広い三角形状。第7胸節側突起も明瞭な2葉状だが, どちらの突起も三角形状である。第8胸節腹面突起は丸い(図2F)。第5, 6腹節亜中央隆起線, 第4-6腹節中間隆起線, 第2-6腹節側部隆起線, 第1-5腹節縁部隆起線が後端棘を有する。尾肢叉状突起は内棘外縁に丸い葉状の張り出しを1つ有する(第2図G)。尾肢外肢基部節は9可動棘を有する。尾節の表面は非常に浅いくぼみが散在する。中央隆起線は明瞭で, 後端棘を有する。亜中央棘, 中間棘, 側棘, 前側突起の基部前

方には低い隆起線を有する。亜中央歯は3-5歯, 中間歯は5-8歯, 側歯は1歯。尾節腹面は平滑で, 肛門の後方に短い隆起線を有する(第2図H)。

色彩. 全身は薄く緑色がかった白色(第3図A)から薄茶色(第4図B)。生時では眼の角膜は金属光沢のある黄緑色。第1触角は全体的に白色で柄部と鞭部に黒斑が散在する。第2触角の鞭部は白色で黒斑を欠く。第2触角鱗片には黒斑が散在し, これは前縁に密に集まる。捕脚は指節前節ともに白色で,



第3図 シンオキナワシヤコ。A, YCM-C1096, オス, 全長 79.2 mm, クローブオイルで麻酔後に撮影; B, UMUTZ-Crs-Sto-46, メス, 全長 89.7 mm; C, UMUTZ-Crs-Sto-46 のラベル。スケールは 10 mm。

Fig. 3 *Oratosquilla inornata*. A, YCM-C1096, male, TL 79.2 mm, photographed after anesthetized by clove oil; B, UMUTZ-Crs-Sto-46, female, TL 89.7 mm; C, label of UMUTZ-Crs-Sto-46. Scale bars = 10 mm.

前節は指節との関節付近に黒斑を有する。捕脚腕節と長節の側面は薄い桃色を帯びる。捕脚長節の背面には黒斑が密集する。歩脚は全体が白色。胸節・腹節の側部隆起線よりも外側は薄い桃色を帯びる。第6胸節から第6腹節にかけて、各節の後縁や隆起線に沿って黒斑が密集する。腹節の後縁は薄い緑色。尾肢原肢と尾肢外肢基部節は全体が白色で、背面の隆起線は薄い緑色。尾肢原肢背面棘や尾肢叉状突起の先端、尾肢外肢可動棘は薄い赤色。尾肢内肢は後方半分の外縁に沿って黒斑が密集する。また、後端

には白色や薄い黄色の色素胞が集まる。尾肢外肢は内側半分が黒色で、それ以外の外側半分は白色や薄い黄色の色素胞を密に有する。尾節は亜中央棘、中間棘、側棘、前側突起の基部前方の隆起線部分と中央隆起線は緑色。亜中央棘、中間棘は基部に黒斑が密に集まり、先端は薄い赤色。尾節前側突起の内側、第6腹節中間隆起線の後方に当たる部分には白色の色素胞の集まりを1対有する。

同定。本研究で再発見した UMUTZ-Crs-Sto-46 (備



第4図 シンオキナワシャコ (YCM-C1086) の沖縄島における生息環境. A, 巣穴の外観. 三角はU字状の巣穴の開口部を指す. B, 採集時の様子. 中央黄色のものが卵塊.

Fig. 4 Habitat of *O. inornata* (YCM-C1086) in Okinawajima Island. A, Appearance of the burrow. Triangles indicating one pair of U-shaped burrow openings. B, *O. inornata* collected by yabby pump with egg mass.

考参照)と、新たに琉球列島より採集された標本は、形態にて記載し、図示した形質(第2図)を有しており、これは Ahyong *et al.* (2008) の示す *O. inornata* の判別形質(全身に微かにくぼみを有する; 眼棘が鈍く尖る; 額板は縦長に見えるが長さより幅の方が広く、前縁が平らか丸みを帯び、背面隆起線を欠く; 頭胸甲中央隆起線のY字型分岐を有する; 捕脚指

節は6歯を有し、腕節背面隆起が分断されない; 大顎髭を有する; 第6胸節側突起の前葉が大きく、幅広で、四角形状あるいは台形状であり、その先端縁は平らかわずかに丸い; 尾節叉状突起の内棘外縁に小突起を有する; 尾節外肢末節は内側半分のみが黒色; 尾節の背面には微かなくぼみが散在する; 尾節腹面は肛門後方の短い縦走隆起線のみを有する)に

よく一致した。ただし、本研究の検討標本では額板長は幅の0.96倍から1.1倍程度であったため、長さより幅の方が広いとは限らなかった。色彩を確認できた標本については、Ahyong *et al.* (2008: fig. 122)の台湾産標本や、Ahyong and Kumar (2018: fig. 2F)のインド産個体と一致した。さらにYCM-C1096については16S rDNA配列532 bp (GenBank登録番号PX861713)を取得し、Blastを用いて相同性検索を行ったところ、Van Der Wal *et al.* (2019)が系統解析に用いた台湾産*O. inornata*の配列(MH168220, バウチャー標本はオーストラリア博物館にAM P. 102210として収蔵)と99.55%の相同性を示した。以上を総合的に考慮し、本研究の調査標本は*O. inornata*に同定した。外部形態について*O. inornata*はオキナワシャコ*O. perpensa*に似るものの、より縦長の額板を有すること、第6胸節側突起の前葉が四角形状(オキナワシャコでは三角形形状)であることなどから判別できる。また、*O. inornata*は尾節の中央隆起線上に黒斑を欠くが(第3図A)、オキナワシャコでは尾節の中央前方に黒斑を有する(Ahyong *et al.*, 2008: fig. 133 参照)ため、この点でも区別できる。

分布．タイプ産地はオーストラリア南部で、インド東部、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ベトナム、台湾、日本に分布する(Ahyong *et al.*, 2008; Ahyong, 2016; 本研究)。標本に基づいた日本における報告は本研究が初となる。国内では琉球列島の沖縄島と奄美大島からのみ発見されている(第1図)。

生態．潮間帯から70 mまでの泥底や砂泥底に巣穴を掘って生息するとされる(Ahyong and Naiyanetr, 2002; Ahyong *et al.*, 2008)。本研究では採集当時の状況が不明なUMUTZ-Crs-Sto-46以外、全て干潟から採集された。主にサンゴ礫交じりの砂泥干潟において営巣が確認されたが(第4図A)、泥質の干潟からも採集され、その場合は滞筋など近辺よりも比較的堅い地面に巣穴開口部が見られた。巣穴鑄型をとる調査を行っていないが、巣穴を指で辿りながら掘るともう1つの開口部に繋がっているため、単純なU字型をした巣穴に生息しているものと考えられる。なお、夜間の調査時には砂泥干潟の潮だまり内を歩きまわる個体も見られた。沖縄島では5月(RUMF-ZC-6546)と8月(YCM-C1086; 第4図)に卵

塊を保持した個体が採集されている。

備考．Osawa *et al.* (2004)や三橋・武田(2006)が示しているように、東京大学総合研究博物館には駒井卓により報告された口脚目標本の一部が収蔵されている。その内の1ロットであるUMUTZ-Crs-Sto-46(図3B)は全長89.7 mmのメス1個体で、この全長と性に加え、ラベル(図2C)に残された当時の同定結果である学名、採集年、採集場所の情報から、当該標本が駒井(1914)、Komai(1927)にて用いられた標本であると判断した。当該標本には上述の判別形質、特に、縦長の様相を呈する額板と、四角形状ないしは台形状の第6胸節側突起前葉が認められたため、オキナワシャコではなく*O. inornata*に同定された。三橋・武田(2006)はUMUTZ-Crs-Sto-46をシャコ*Oratosquilla oratoria* (De Haan, 1844)としてリストに記載していたが、これは誤同定である。また、はじめに述べた通りオキナワシャコの琉球列島における分布の根拠となる標本は駒井が用いた那覇産標本、つまりUMUTZ-Crs-Sto-46のみである。したがって、オキナワシャコは琉球列島からの記録は無いものとして扱うべきであると判断される。なお、これまでの筆者の琉球列島における調査において、シャコモドキ属は*O. inornata*のみが採集されている。そこで本研究では、真に沖縄に産する*O. inornata*に対して、和名シンオキナワシャコを提唱し、標準和名の基準標本にはYCM-C1096を指定する。

謝辞

上島 励氏と波々伯部夏美氏には東京大学総合研究博物館の標本調査について、伊藤大輝氏、清水直人氏、佐藤大義氏らには調査への同行や標本の収集について、成瀬貫氏、平良渉氏には標本の登録に関して、それぞれ協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。本研究の一部は2022年度笹川科学研究助成、科学研究費助成事業特別研究員奨励費(JP23KJ1783)による支援を受けて行った。また、本研究での実験の一部は琉球大学研究基盤統括センターの共用機器を利用した。

引用文献

Ahyong S. T. 2001. Revision of the Australian Stomatopod Crustacea. *Records of the Australian*

- Museum*, Supplement, **26**: 1–326.
- Ahyong S. T. 2004. New species and new records of stomatopod Crustacea from the Philippines. *Zootaxa*, **793**(1): 1–28.
- Ahyong S. T. 2012. Stomatopod Crustacea of the KUMEJIMA 2009 Expedition, Japan. *Zootaxa*, **3367**(1): 232–251.
- Ahyong S. T. 2016. Results of the Comprehensive Marine Biodiversity Survey International Workshops 2012 and 2013: Stomatopod Crustacea. *Raffles Bulletin of Zoology Supplement*, **34**: 455–469.
- Ahyong S. T. and Naiyanetr P. 2002. Stomatopod crustaceans from Phuket and the Andaman Sea. *Phuket Marine Biological Center Special Publication*, **23**(2): 281–312.
- Ahyong S. T. and Chan T.-Y. 2008. A new species of *Oratosquilla* Manning, 1995 (Crustacea: Stomatopoda: Squillidae) from the Indo-West Pacific region with a key to the genus. *Zootaxa*, **1775**(1): 61–68.
- Ahyong S. T., Chan T.-Y. and Liao Y.-C. 2008. *A Catalog of the Mantis Shrimps (Stomatopoda) of Taiwan*. vii + 191 pp. National Taiwan Ocean University, Keelung.
- Ahyong S. T. and Kumar A. B. 2018. First records of seven species of mantis shrimp from India (Crustacea: Stomatopoda). *Zootaxa*, **4370**(4): 381–394.
- 有山啓之 2004. 大阪湾に生息するシャコ類について. 大阪府立水産試験場研究報告, **15**: 23–27.
- 浜野龍夫 1989. シャコ類の生物学 17. 日本産シャコ類の分類と検索 –15 シャコ科 (シャコ属 – 下・ヨツトゲシャコ属). 海洋と生物, **11**(5): 398–401.
- 浜野龍夫 2005. シャコの生物学と資源管理 水産研究叢書 51. 210 ページ. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 駒井 卓 1914. 日本産口脚類の数種に就きて. 動物学雑誌, **26**(312): 459–468.
- Komai T. 1927. Stomatopoda of Japan and adjacent localities. Memoirs of the College of Science. *Kyoto Imperial University*, Series B, **3**(3): 307–354.
- 三橋雅子・武田正倫 2006. 東京大学総合研究博物館所蔵のシャコ類 (甲殻綱口脚目) 標本リスト. 上島 励 (編), 東京大学総合研究博物館動物部門所蔵無脊椎動物標本リスト, 東京大学総合研究博物館標本資料報告 (62): 107–113. 東京大学総合研究博物館, 東京.
- Osawa M., Mitsuhashi M. and Takeda M. 2004. Discovery of the type specimen of *Lysiosquilla crassispinosa* Fukuda, 1909 (Crustacea: Stomatopoda) and some Fukuda's stomatopod specimens. *Benthos Research*, **59**(1): 1–10.
- Palumbi S. R., Martin A., Romano S., McMillan W. O., Stice L. and Grabowski G. 1991. *The Simple Fool's Guide to PCR. Version 2.0*. 45 pp. Department of Zoology and Kewalo Marine Laboratory, University of Hawaii, Honolulu.
- Schram F. R., Ahyong S. T., Patek S. N., Green P. A., Rosario M. V., Bok M. J., Cronin T. W., Mead K. S., Caldwell R. L., Scholtz G., Feller K. D. and Abelló P. 2013. Subclass Hoplocarida Calman, 1904: Order Stomatopoda Latreille, 1817. In: von Vaupel Klein J. C., Charmantier-Daures M. and Schram F. R. eds. *Treatise on Zoology-Anatomy, Taxonomy, Biology. The Crustacea, Vol. 4, Part A*: 179–355. Brill, Leiden and Boston.
- Silambarasan K., Kar A. B., Prasad G. V. A., Pattnayak S. K. and Jeyabaskaran R. 2025. On a collection of stomatopod Crustacea in the Fishery Survey of India, research cruises from the northeast coast of India. *Zootaxa*, **5637**(2): 337–350.
- Van Der Wal C., Ahyong S. T., Ho S. Y. W. and Lo N. 2017. The evolutionary history of Stomatopoda (Crustacea: Malacostraca) inferred from molecular data. *PeerJ*, **5**: e3844.
- Van Der Wal C., Ahyong S. T., Ho S. Y. W., Lins L. S. and Lo N. 2019. Combining morphological and molecular data resolves the phylogeny of Squilloidea (Crustacea: Malacostraca). *Invertebrate Systematics*, **33**(1): 89–100.